

第19話 町のショール屋さん

キャビンクルーの女性が楽しみにしていたのはインド古来のマッサージ、アユールヴェーダを体験するのと一時日本で爆発的に流行ったパシュミナショールを買いに行くことでした。当時は日本の10分の1くらいの値段で買えたと思います。普通はホテルの売店で買うのですが、数も少ないので僕の知り合いのショール屋さんに案内したらもう大喜び、色とりどりのショールが壁一面の棚にありその前にズラーと店員さんが座って次から次へと出してくれるのです。見終わったら、ポンポン後ろに放り投げるのですが、それを下働きの少年が拾って棚に戻します。いいかげんに決めて買って下さいよなどという感じは全然ありません。

インドの女性はみな大きなショールをまといますが、日本の女性は小柄なのでこの大きなショールは着こなしが難しくショールにからまっているように見えてしまいちょっと可笑しいです。

この店はデリーでも有名なショール屋なのですが、店の人達と親しくなって買わなくてもいつも遊びに行っていました。アンティークなショールや一人の職人が何年もかけて作った作品などを見たり、少年が運んでくるチャイ（インド式のいわゆるミルクティーです）を飲みながら、世間話をしているとしみじみインドを感じるのです。

頼まれて日本語を教えたことがあるのですが、みんなメモを取ったりして熱心なものでした。ショールを売るときは「ヤスイ、ヤスイ」というより「タカイけど、イイシナモノです」と言った方がいいですよとアドバイスしたら早速試して、言われた客がさかんに頷いているので、それから僕はグッド・ティーチャーと言われるようになりました。

